

信仰團體の社會學的一考察

三 枝 樹 正 道

信仰ニ云ふ社會的紐帶によつて結合せる、現實態としての集團、即ち教團、或は宗團（佛教に於ける僧伽、基督教に於ける教會）ニ呼ばるゝ社會的意味的結合態に就いて、客觀的、形式的なる一考察を試みようと思ふのである。

凡そ宗教現象の發生する本質的要因、或はその基本的なる地盤である信仰を、社會的紐帶として結合せる歴史的現實態にあつては、その信仰の對象、或は、その正しき體現者たる教祖又は宗祖の人格は、絶對的なるものである。従つてかゝる信仰によつて結合せる、所謂、宗團或は教團は、その宗祖或は教祖の人格によつて、自ら種々なる形式或は色彩を表現するものである。換言すれば、信仰團體にあつては、常にその中心的人格即ち宗祖或は教祖、謂ゆる師表たるべき人の人格によつて、その宗團或は教團は、單一なる色彩に塗りつぶされてしまふものである。故に信仰團體にあつては、その成員たる宗團人即ち信者の個々の人格は、その宗團内にあつては、これらの祖ニ云はるゝ人、即ち師表の人格の中に溶け込んでしまふものである。従つて宗團人即ち信者は、その祖即ち師表の言葉をを通じて、或はその生活態度を通じて、各自の個性を、その師表の人格の中に没入せしむるものである。蓋し師表即ち宗祖或は教祖は、宗教價值の體現者にして、即ち聖價值の人格化されたる社會的現實在であり、而して信仰は、この人格化されたる宗教價值を通じて、聖價值への全人格の絶對的歸投であり、無條件的歸依であるからである。かの佛教に於ける多くの列祖が、不惜身命的態度を以て、その法燈を師資相承せられしは、即ち此代表的なる例である。

かくの如く、本來宗教團體は、その純粹なる様相に於いては、聖價值の社會的現實的表現たる師表の一人格によつ

て、代表せられ、且つ統率せられてをるものである。この點は餘他の文化現象と大いに異なる一つの特色である。暫く、他の文化現象に就て考察してみるに、まづ道德の世界にあつては、各人はその世界に於ける限り、各自獨立なる一人格者として、而も平等、自由の原理の上に立脚するものである。故に茲に於ては、その成員各自の人格は、明瞭に獨立對等の地位を保持することが必要である。この世界はカントの道德律にもあるが如く、決して他人の人格を無視することは勿論、自己の人格をも没却することは、不可能であり、許されない世界である。又藝術の世界を眺めて見ても、藝術家は、それが創作の場合にあつても、鑑賞の場合にあつても、その藝術の對象に對しては、没我、恍惚の狀態に立ち入るべきは自然の姿ではあるが、その印象、及び表現の兩作用に於ける出發點にあつても、且つ又結果にあつても、その他、對他人の關係に於ても、決して自己の個性を没却するものではない。たゞひ師匠の藝風を模倣するにしても、個性的表現を必要とするのは當然の歸結である。又交易融通を原則とする經濟現象の世界にあつても、各人は對等の地位にあつて、有無相通の交際が行はるべきものである。卸商人は卸商人として、小賣商は小賣商として、顧客は顧客として、更に製造元は製造元として、相互に人格的に、個性的に、獨立者として對等の取引が行はれてゐるのである。又支配統率の關係を基本とする、政治現象に於ても同様である。たゞ支配の關係は、稍もすれば、その命令系統の一元化を要求するが故に、時には被支配者の個々の人格は、無視さるゝが如き狀態を現すものであるが、然しその場合、それが若し強制的意味を有するもの、或は強制的結果であるならば、強制は既にそのこゝ自體に、被支配者の自己の意志に反する壓力の存在を想定するものであるから、その限りに於て、壓迫せらるゝ自己、即ち個人格を無視して居るものではない。又然らざる場合、即ち服從の場合にあつては、支配者の意志に、自己の意志を従はしむる狀態であつて、是れ亦自己の存在、従つて自己の人格は明瞭に、その存在が認識せられをるものである。この他の文化現象に於ても、吾人は右同様の結論を得るのである。

然るに、獨り宗教現象にあつては、即ち信仰による結合社會にあつては、その師表の人格の中に、總べての信者の個性は没入してしまふのである。故に宗團或は教團は、前述の如くこれを代表する師表の人格によつて、指導せられ統率せらるゝものである。故に信者にまつては、その師表の一言一行は、實に絶對指針にして、些の疑義もこれに挿入する餘地なく、無限絶大なる權威を以て信者の言行を左右するものである。此場合極言すれば、信者たる各個人は師表の意の儘に運くのみであつて、自己意識すらも意識せないものである。是れ師表、即ち教祖或は宗祖は、絶對歸依の對象たる宗教價值の人格化されたる姿即ち聖なる價值の體現者であるからである。

抑も信仰は、有限未完の自己を、絶對完全なる宗教價值に歸投して行く生命現象の一姿態である。かくて信仰による結合團體、即ち宗團或は教團は、一體感的に、共同社會的に活動するものである。かの宗團人がその信仰する法即ち真理の爲に、自己の身命を賭して盡力してをる事實は古今枚舉に遑のない程多數にある。或は師表の爲に全身全靈を捧げて惜まない状態は宗團、教團内に於て、始めて見らるゝ現象である。是れ信仰團體は常に人格的に單一なる行動をなすものであることを物語るものである。

次に經濟上よりこれを考察するに、本來は前述の如く身命をも捧けし信仰であるが、身命は簡單に又度々捧げらるべきものでなく、不惜身命の意地、入無爲の決心は必要であるが、文字通りのかゝる行爲は屢々實現さるべきものではない。そこで身命に次で生活上に大切な財物の喜捨が教團へ對して行はるゝに至つたのである。元より此場合、佛教の原始教團にも現れた如く、その始めは師表即教祖、宗祖に喜捨するものであるが、それは師表の人格は全宗團全教團を包容するものなるが故に、その儘が四方物として教團宗團への喜捨となり、やがては師表も絶對的宗教價值の前にはその教團内に溶没するものであるから、この喜捨は教團宗團への喜捨として、始めから四方物化されるに至つたものである。かくて宗團人は身命をも捧ぐる意地に於て、その全財産を四方物として宗團に喜捨するに至るのである。故に宗團

人にあつては最早自己の周圍に小さき城廓を設けて、防備警戒ををく必要は全く消滅し、茲に自己の歸依する師表によつて全財産も亦一元化せらるゝのである。

かく信仰團體にあつては、その生命と財産が師表によつて一元化せられ、純化せられて綜合せられゆくものである。而も本来宗教價値の最も著しき屬性は無執着であり、進展であり、融通無礙である。従つて茲に一元化せられ綜合せられたる生命と財産は、再び四方物として全人類全社會の純化に躍動すべきものである。この生命と財産の躍動に指針と力を與へるものこそ師表の人格である。かくて信仰團體は偉大なる力を有するものであるから、それだけにそれを自由に指導する師表の人格は重大なる意義を社會に投影するものである。

たと然し、人類は社會が進歩し文化が發展するに従つて、頗る多角形的なる相互關係の現實生活を營むものである。故に單に信仰關係による宗教的生活のみを營み居るものに非ずして、即ち純粹なる信仰人になりきることを得ずして、此他に幾多の異なる世界にも生活するものである。この爲に小數の特殊人か、或は特殊なる限定されたる時間に於てのみ、かくの如き純粹なる宗教的生活は營み得らるゝものである。

次に教義或は宗乘に就て考察する。教義或は宗乘は何れの信仰團體に於ても、一つのドグマである。教義或は宗乘は宗教價値が師表の人格を通じて開證されたものである。従つて師表に絶對歸依をなす宗團人にまつては、これは決して批判の對象とはなりえない。恰も師表が批判の對象でなく、歸依の對象であるに等しく教義、宗乘も亦歸依の對象であり、拜むべき對象である。而して更に進めて云へば、自己の信仰の完全なる姿に於ける表現である。故に信者にまつては教義宗乘は一面自己の理想目標であると同時に他面その社會的表現である。従つてこゝに於ては批判作用に於けるが如き主客の對立はあり得ないのである。

但し一方視角を轉じてみるに、宗教の本質最高最終の目的は單に自己個人の救濟解脱に止まらずして衆生無邊誓願度

こ云ひ全人類の救済であり、煩惱無邊誓願斷こ云ひあらゆる苦悶よりの解脱である。従つて此理想實現即その本願成就の爲には時機相應、機教相應は、いかなる宗教にこつても本質的に必要不可缺の條件である。故に宗教がその本質的使命を完成せんとする爲には時處位に相應してゆく發展性を、それ自身に内在、保持するものでなければならぬ。かくて教義、宗乘は他方に於ては科學的批判にも堪え得て、永遠に發展進化し、地上の一切の悩みを解脱せしむるものでなければならぬ。

眞に偉大なる師表、眞に人格の圓滿なる師表、眞實なる宗教價値の體現者によつて教示されたる教義、宗乘は、かくの如き意味に於て、其自身に發展性を内在本具して、自己進展をなすものである。釋尊の説示が今に發展して人類救済の指導となり、尙ほ將來に信仰の對象として淨火を輝かしつゝある事實は、眞實なる宗教の眞髓を示すものである。これはその宗團人、或は教團人の宗教的實踐が自然的に而も必然的にかくせしむるものにして、單なる對他的關係に基く單なる個人の作爲的な現象ではない。

然るに、師表たるべき人の人格上に、或はその精神的價値體現の上に於て、何等かの缺陷があり、従つてその教義宗乘の上に、未完不備の點があるならば、それは當然絶對歸依の對象たる宗教價値、即ち神佛の聖旨を完全に表示することは不可能である。かゝる結果その教義、宗乘は必然的に改作を餘儀なくせらるべき運命を持つものである。これは當然のこゝではあるが、此場合、時には信者がその不完誤謬を知りつゝその信者として、自己の屬する宗團の教義の對社會的現實的價値を失墜せざらしめんが爲に、恰も宗祖教祖の意圖なるが如くにその教義を改作することがある。然しこの時、その信者は、既に純眞なる意味に於て、師表を離れ、宗教的信仰關係を離れて、唯だ自己が屬するこ云ふ宗團或は教團への愛着により、或は同信獲得の爲に、或は宗團の隆盛を希念するの餘り世に迎合せんとして、教義、宗乘の改作を行ひしものである。かゝる力への愛着、俗的權威への執着の發する所には既に眞の宗教は存在せない。現時多くの

新興宗教云はるゝ宗教には此例に相當するものがかなり多く存在することを知る。嘆かほしきことである。眞實なる宗教信仰の興隆せんことを祈る。